

# 幼児期にふさわしい体験や活動とは何かを考える

～異年齢交流の中で遊び込める環境づくりの工夫を通して～

山口葉月\* 中尾典子\* 吉村美保\* 川口央\* 岩坂ゆかり\* 井口均\*\*

\*小ヶ倉幼稚園 \*\*長崎大学教育学部

## 1. 本園の紹介

小ヶ倉幼稚園は、「親子のふれあいを大事に、歩いて通える幼児教育の施設を」という町民の強い要望により設立された経緯をもつ学校法人立幼稚園で、地域と共にある幼稚園としての歩みを重ねている。昭和49年3月、自然豊かな小学校跡地に小ヶ倉町の共有林から生じた分収金を基金にして建設され、町内から選出された役員（理事長）に加え、園長、教諭（4名）、非常勤教諭（1名）、そしてバス運転手（1名）の計8名の教職員により運営されている。昭和49年4月、第1回入園式を80名定員でスタートさせ、同年5月5日に創立記念式典も開催した。

現在の在園児数は表1にあるように、少子化と共働き家族の増加の影響で大幅に減少し、クラス間での人数格差も大きくなっている。

表1 クラス構成(平成24年7月17日現在)

	クラス名	男(新入園児・転園児)	女(新入園児)	計
3歳児	ばら	2(2)	2(1)	4
4歳児	もも	10(3・1)	6(3)	16
5歳児	うめ	9(0)	1(0)	10
		21(5・1)	9(4)	30

本園の教育方針は、学校教育法に則り、表2に示した三つの重点目標を掲げて恵まれた自然環境の中で集団生活を経験させ、伸び伸びとした個性ある豊かな人格形成を目標としている。

表2 園の主な教育方針

	保育目標	めざす子ども像
1	楽しいこと いっぱい	やりたいことをとことんやる。それらのことで自ら学び、考え、工夫し、失敗と葛藤を繰り返しながら自分で解決できる子に。
2	自然がいっぱい	動植物とのふれあいなど、恵まれた自然環境の中で、豊かな感性と、小さな発見にも目を輝かす子に。
3	大きく伸びよう	見て、聞いて、夢をひろげてつくり出す喜びを知る子に。

## 2. 主題設定の理由

日々の保育を行う中で、目の前の子どもたちが思い抱く願いに応じた、その願いを叶えるにふさわしい経験や遊びをどれだけ体験させているのか。また、行事に向けての活動に追われ、子どもたちが自発的に取り組んでいる遊びや興味・関心への注意を見失ってしまっていないか、ということにも疑問を感じていた。さらに、最近では少子化により兄弟がいなかったり、身近な生活圏内に子ども集団が未形成なままなどにより、入園まで同年代・異年齢の子どもとのかかわる交流経験をほとんどもたない園児が増えている。せっかくの集団生活の場である本園のクラス編成の実態をみても、クラスによって人数が極端に少なかったり、男女比の偏りが大きかったりなどにより、同年齢クラス集団だけでの多様な交流経験づくりに限界を感じていた。だからこそ現状でも可能な方法として、子ども同士のかかわり合いやコミュニケーションを多様に引き出せる具体的工夫が必要であると実感している。

そこで、本園の日々の保育や行事への取り組みを見直し、子どもたちがどんなことに夢中になっており、何を願っているかについて、担任間で共通認識を深めることから出発した。その過程で、在園児が新入園児を援助しようとする姿、またクラスの枠を超えて親しい友だちと遊びたい願いがあることにも気づいた。少人数、小規模の園だからこそできる、クラスを越えた異年齢間の親密なかかわり合いをよりきめ細やかに引き出せれば、子ども同士での育ち合いも生まれる可能性が大きいのではないかと気づいた。そのために、一人ひとりの興味・関心（＝子どもの願い）を読みとり、その実現に向けた担任のかかわり方や環境構成のあり方を実践的に再検討することが重要と考える。その過程で、結果として何らかの活動に夢中になれることが幼児期にふさわしい体験や活動につながると考えている。

## 3. 研究を進める上での視点

### (1) 子どもの具体的な言動を観察することで子どもを理解

登園後や食後の好きな遊びの時間を中心に“子どもたちが自発的にしている遊び”を具体的に観察し、目の前にいる子どもたちの現在の興味や関心の対象とは何か、子どもが感じている面白さの中身とは何か、自ら取り組もうとしている活動とは何かなどを把握することを重視した。

### (2) 子どもの遊びをより面白くする環境構成の工夫

観察で見えてきた子どもたちの興味や関心をヒントに、担任が環境構成を工夫することで遊びをより面白くできないか、子ども同士のかかわりを深められないかを積極的に試みた。今回、具体的には「変身グッズ（着ぐるみや衣装、

小道具など)」や「砂場遊び」「しゃぼん玉」などの環境構成について工夫を試みた。

### (3) 子どもについての行動を記録し、意見交換

担任の意図的な環境構成によって、子どもの遊びのイメージがどのように変容するのか、その中で見られる子どもの言動や活動の展開過程の変化を、異年齢児間のかかわりを中心に観察し、記録する。それについて担任間で話し合いによる意見交換を行い、担任の働きかけや環境構成のあり方についても見直し、次の実践に活かしていくようにした。

## 4. 各クラスの観察と子ども理解（2012年5月14日時点）

### (1) 年少組（ばら：3歳児）

4月の入園当初は不安で泣いてしまう子もいたが、すぐに笑顔で登園できるようになった。集団生活も初めてのため、一人遊びや担任とのかかわりが多い。好奇心旺盛で、いろいろなものを試しながら活発に遊び、次々に違う遊びを始める。男児はヒーローが大好きで、ヒーローになりきって突然戦いごっこを始める。在園児N子は集団生活に慣れている分、率先してみんなを引っ張ってくれる。しかし、今まで集団での遊びをしていたので、新入園児との遊びに物足りなさを感じている。

5月から(その後、二か月間)はY子が休園のため、三名になった。そのことがあってか、残された三人が寂しそうにする様子も見られ、仲間意識が出てきたように思われる。「一緒に遊ぼう。」と誘い、直接子ども同士でかかわり合って遊ぶというより、同じ場所で安心してそれぞれの遊びに夢中になれるようになった。一人が始めた遊びがクラスみんなに広がることも多い。また、年長児が虫や植物に興味を示す姿を見て、S男が虫や植物に目を向けるようになった。S男をきっかけにクラスみんなへと広がってきている。

担任としては、子どもたちとの信頼関係を早く築き、子どもの心の拠り所になることを心がけた。一人ひとりの気持ちに寄り添えるようにし、個々の子どもの好奇心に共感したり、広げたりするための環境を整えるようにした。その取り組みの中で、担任が子どもと一緒に遊びを楽しみながら進めることが必要と感じた。子どもの全てを受け止め、まずは「明日も幼稚園に行きたい。」「幼稚園って楽しい。」と思ってもらえるように毎日の遊びでの楽しさを共有し合えることを重視した。

### (2) 年中組（もも：4歳児）

在園児は、新入園児や転園児らをひっぱってくれ、注意や声掛けをしてくれる。話もよく聞き、身支度や片付けもスムーズに行い、お手伝いが好きである。その代表格がS子やR男で、S子は担任が設定した遊びにすぐ興味をもち「やりた

い！」と取り組んで、他の子どもが興味をもつきっかけとなってくれたり、ごっこ遊びが好きなR男は積極的に仲間を集め、遊びを進めるリーダーのような存在である。仲良し関係もできており、全体としても仲が良く、ほとんどケンカすることがない程だが、友だちに負けたくないという競争心はある。「少し難しいことに挑戦したい。鉄棒や長縄など、自分の力をもっと伸ばしたい。それを見てもらい、認めてほしい」という願いがあがる。新入園児や転園児は、徐々に身支度や園生活のルールを覚えてきており、女兒はスムーズに身支度などができるが、特にM男やR男ら男児は、すべきことやお約束より、保育室内の玩具や友だちがしている遊びなど、自分の興味があるものにすぐ目がいってしまう。「遊び足りない、自分のペースで遊びたい」という願いがあがる。

クラス全体としても、言葉が発達したり、できることが一気に増えるためか「先生、先生！」とよく呼んだり、例えば縄跳びや鉄棒、ピアノなど、自分ができるようになったことを「できるよ！見てて！」と言うように、見て欲しい、聞いて欲しい、認めて欲しいという気持ちが強い。虫や植物に興味がある。外遊びが好きな子が多く、鬼ごっこや砂場遊び、スクーターなどで遊んでいる。室内遊びが好きな子は、粘土やブロック、紙ヒコーキや双眼鏡などの製作遊びをしたり、字を書くなどして過ごす。活動には意欲的に参加し、特に絵の具やピアノに興味がある。ごっこ遊びも好きで、特にR男やS子、S子と仲良しのTu子が中心となって、家族ごっこやプリキョアごっこをはじめ、宇宙ごっこ、ジャングルごっこなど、自分たちで考えたごっこ遊びを自発的に仲間を集めて遊んでいる。

新入園児、在園児共に、徐々にお互いの名前を覚え、会話する姿もよく見られるが、遊びは別々の場合が多い。基本的に新入園児は製作や砂場、粘土などのひとり遊びか、新入園児同士で砂場やブランコをしている。在園児は在園児同士で、鬼ごっこや家族ごっこなど、活発な仲間遊びをしている。

担任としては、新入園児については集団生活に慣れ、友だちとの関係を作れることが目標である。また、新入園児と在園児とが混ざり合った仲良し関係ができ、一緒に遊べるようになって欲しい。挑戦する気持ちを発揮させながら、できたことを認めてあげることで自信をつけてあげたい。

### (3) 年長組（うめ：5歳児）

最高学年に進級したことを喜び、誇らしさを感じている。面白いことを言ったり、空き箱で玩具を作って遊ぶなど、誰か一人が楽しいことや面白いことをすると一斉に広がり、それがクラスの流行となって、みんなで楽しむ様子が見られる。このようにお互いの情報を共有するスピードがとても速く、また一人ひとりが自分の興味を見つけて、夢中になれる。夢中になりすぎて衝突することも多かったが、年少や年中からの仲間づきあいでお互いの性格をよく理解していることもあり、譲りあってトラブルを回避しようとする姿も見られる。

降園時間になると、毎日残念がる様子があり、一分一秒でも長く友だちと一緒に

に遊びたい！いろいろなことを共有したい！という子どもたちの思いが読み取られ、クラスの結束の強さを感じる。また、そういった子どもたちの様子を保護者の方々も汲み取って下さり、一緒に園庭で遊んだり、降園後にお互いの家を行き来して遊んだり、事前に連絡を取り合って、一緒に預かり保育を利用したり、と子どもたちの気持ちを実現される機会も多かったため、より一層仲間意識が高まっているように感じる。

男児は、花や虫に興味をもち、見つけるとすぐに捕まえて、周囲に見せて楽しんでる。毎年、年長組が担当する飼育動物（ウサギ・カメ）の世話にも意欲的で、春に生まれたウサギの赤ちゃんを見ようと餌やりで夢中になっている。

唯一の女儿 M 子は勝気な女の子。室内での遊びやままごとが大好きな M 子だが、周囲の男児のほとんどが外での遊びを好むため、その要求を満たせずに不満を抱えているように感じる。M 子が家族ごっこを提案すると、男児数名が賛同し共に遊ぶことがある。男児は、希望する役がテレビなどのキャラクターのため、いつのまにか家を飛び出し冒険に出かけていて、M 子がしたい家の中での言葉や動作のやり取りができずにいる。そのため、M 子が思い描く家族ごっこが行われないまま、いつのまにか終わってしまうことがある。

クラス全体では、遊んでいる途中で何かトラブルがあると、ばらばらに散って遊びが中断してしまったり、すぐに担任に助けを求めて自分たちではあまり会話を進めることができずにいる。つまり、自分たちで話を進めていく経験が乏しい、という点が見られる。また、年齢の低い子どもたちが困っている時、優しく手を差し伸べ、手伝ってあげるなど、日常の中で自然とそのような行動がとれる優しいお兄さんお姉さんでもある。そういったかかわりを通して、年齢の低い子どもたちから憧れをもって頼られる存在になってほしい。

担任としては、M 子が好む遊びも存分に楽しめるようにできないか、そして、年長児としての自覚と誇りを抱き、上記のような具体的な成果を出せる子どもたちに育ててほしい、と願うようになった。

#### (4) 基本的課題

以上(1)～(3)における各クラスの幼児の姿を通して、本園の基本的課題が明らかになった。第一に、クラス単位のみで生活や遊びに取り組んだのでは、子どもの数が少ないため、子ども同士のかかわりや学び合いが活性化されない。第二は、とくに年長児が本園の最年長にふさわしいリーダー性を発揮し、具体的活動を通して一人ひとりが自信を育んでいけるようにする必要がある。

そのための方法として、まず異年齢交流を導入することにした。それにより、子ども同士がクラスの枠を超えた関係づくりの中で学び合ったり、遊びの選択肢を広げることで自分の興味・関心に基づいた仲間関係を楽しんだり、年齢や個人差が積極的に活かされた役割行動が自然と発揮されたりなど、子ども同士の交流と活動内容をより豊かにする機会がつかれるのではないかと考えた。

今回の研究発表のテーマである「幼児期にふさわしい体験や活動」とは何かについて、異年齢交流活動を通して多少なりとも明らかにできればと考えている。

以降で、実際に子どもの姿から見られた興味・関心をもとに、担任が環境構成や遊びの提供を行った事例を挙げ、個々の事例をもとに幼児期にふさわしい体験や活動について検討する。

## 5. 一学期の保育実践と子どもの姿

ここでは異年齢間での交わりが生じた遊び場面を中心に具体的事例を挙げ、ここで子ども同士のかかわりを紹介したい。

### (1) 変身グッズを使用したごっこ遊びの発展（年中児と年少児及び年長児）

【ねらい】

・新入園児と在園児が混在する仲良し関係を作り、みんなで楽しむことを味わう。  
・変身グッズを使用することによってごっこ遊びのイメージをより膨らませて遊ぶ。

【時期】5月24日～6月4日

新年度が始まって約一か月が経つ年中組では、自由に遊ぶ時間に在園児を中心としてごっこ遊びを自発的に行い、盛り上がっている姿が見られた。小ヶ倉幼稚園では、以前保護者がお遊戯会などのために作った衣装を保管しており、お遊戯会や誕生会の催し物をする際などに使用している。その衣装を遊びに取り入れたら、ごっこ遊びが、よりリアルに、より活発に遊ぶことができるのではないかと、何か面白い発展が見られるのではないかと考えた。まず、古くなっている怪獣やカエルなどの着ぐるみや星形の杖などを変身グッズとして自由に使って遊べるよう二階廊下に出してみることにした。

しばらくお姫様ごっこや魔法使いごっこなどをして遊んでいたが、以前園行事でAKB48などの曲に合わせて踊る「ステージショー」の経験がある子どももいるため、アイドル風に何か発展しないだろうかと考え、AKB48のCDをかけてみた。するとすぐS子が「この曲知ってる！」と言って、踊り出した。翌日もいつものように朝の身支度を終えると、女の子たちはドレスを着て遊び出した。S子が「CDかけて！AKBの！」と言うのでかけてあげると、昨日よりもハイテンションで踊り出し、本来はシャイなTu子も仲良しのS子に誘われ、一緒に踊っている。S子が突然「ばらぐみさんに見せたい！」と言いだしたことをきっかけに、Tu子も同意し、すぐ「呼んでこよう」と言い始めた。とても良い発想だと感じたが、年長組や年少組のそれぞれの遊びを中断させてしまうのではないかと、思いや片付けの時間が迫っていることなどを考え、「招待状を書いてみたら？」という提案をした。すぐ「書こう、書こう！」と賛同してくれ、招待状作りが始まっ

た。

年少組への招待状は年少組の担任に渡し、年長組への招待状は年長組唯一の女の子であり、一緒に遊んだことのある M 子に渡した。M 子への親しみを感じていることが分かる。M 子もすぐに「いきます」という返事を書いて届けてくれた。

昼食後に見せることになり、自分から言い出すことを期待して、特に声掛けはせず様子を見守ることにした。食後しばらくして S 子が「ごはんの後って言ったよね!？」と言いに来た。一緒に見せると張り切っていた Tu 子は食べるのが遅く、まだ食べ終わってなくて、気になったが、S 子の気迫に押されて「じゃあみんなを呼んで来たら？」と担任が促すと、嬉しそうに呼びに行った。その間にゴザを敷いたり、イスを準備し、客席とステージの環境構成を担任が行った。

すぐに年長組と年少組の子どもたちが担任と一緒に来てくれた。S 子はまだ食べている Tu 子に「早く」と言って促しており、担任としても、人前で緊張しやすい Tu 子と一緒に経験させたいという思いがあった。そこで、皆が来てくれている状態で、始める前に飽きたり、「まだ？」と不満の声が出てはいけないという思い、また Tu 子への促しも視野に「始めていい？」と S 子に聞いた。少し不安そうな S 子だが、決意したように「うん」と言ったので CD をかけると、大きな声で「ワン、ツー、スリー、フォー！」と言ひ、踊り始めた。最初は緊張している面持ちだったが、担任が率先して盛り上げることで、子どもたちも真似をして一緒に盛り上げてくれ、徐々に緊張が解けてきたようだ。隣で S 子を見ながら踊りだす A 男や M 男、自分も前に出て注目されたい気持ちもあるが勇気が出ない年長組の K 男や Y 男、客席の後ろの方で一人曲に合わせて体を動かしている年少組の K 男などの姿も見ることができた。

翌週も S 子と Tu 子が「また見せたい」と言い出したが、「子どもたちだけでどこまでできるのかを見たい。また、言われた通りではなく自発的に遊べるようになって欲しい」という思いから、前回のような声掛けや手伝いは極力せずに見守った。S 子と Tu 子の発言を聞いた他の子どもたちも「じゃあみんな呼んで来よう！」と言って、W 男らがお客さんを呼びに行ったり、R 男がゴザを敷いたりイスを並べてくれた。前回踊ることができなかった Tu 子も S 子に引っ張られ、最初は逃げようとするが、一緒に踊ることができた。したい気持ちと恥ずかしい気持ちがあり、緊張した面持ちだが、踊りきり満足した様子が見られた。

その後も毎日のようにドレスを着て遊んでいる。変身グッズは年少組へも広がり、よく着て遊ぶようになった。衣装をハンガーに上手く掛けられない様子を見た年長児 S 男がかけてあげる姿、変身グッズから発展した遊びの中でも、剣作りをきっかけに年長組の Y 男と一人遊びが多かった年中組の新入園児 I 男が戦いごっこを一緒にして遊ぶ姿などが見られた。さらに、今回の経験から、ジュース屋さんごっこや人形劇遊びなど、新しい遊びが盛り上がると「他のクラスにも見せたい」「呼ぼうよ」という声が出て、度々招待する姿が見られた。

## (2) 製作あそびで見られた子どもの変化（年長児と年中児）

### 【ねらい】

- ・自分の作りたい物をイメージし、作り上げる楽しさを実感する。
- ・教師や友だちの姿を模倣したり、共に考えながら作り上げる楽しさと喜びを感じる。

【時期】 6月5日

製作が好きな年長児。雨の日はとても盛り上がるので、スペースの確保、材料の追加など、コーナーが充実するよう心がけた。

子どもたちはすぐ夢中になって遊んだ。その中で、Kz 男は自分好みのコマになるよう時間をかけて作っていた。Kz 男は、製作が大好きでいつも細部までこだわりをもって上手に作り上げる手先の器用な年長男児。同じコマでも色の塗り方によって違う見え方になること、折り方、中央の穴のあけ方、力加減など様々な要素によって回り方が違うことなどに気づき、友だちと完成したコマを見せあい比べることの楽しさを実感していた。そういった点に面白さを感じ、完成度をより高めたいと工夫することに夢中になっているようだった。

Kz 男の「できたー」という歓声を聞きつけた年中児が廊下から見ていた。中の様子が気になったようだった。それに気づいた Kz 男は、とてもイキイキした表情で「みんなに見せてくる」と保育室を出ていった。その時の Kz 男の表情には、自分が一生懸命工夫して完成させた作品をみんなに見てほしい、誉めて欲しいという気持ちが感じられた。

戻ってきた Kz 男は、「S 君（年中児）が作りたいって」と話してくれ、一緒に来てきた S 君に「S 君こっち～」と案内してから熱心に教え始めた。S 男は、年長児たちが何か珍しい物を作っていることに興味を抱いたものの、なかなか自分から年長児の中に入っていけない様子だった。そんな時、Kz 男の声かけが S 男の背中を押してくれたようだった。

S 男は、年長児と同じものを一緒に作っているということに満足しているようで、Kz 男と二人で協力して完成できたことを共に喜んでいた。

S 男は自分のクラスへ戻って友だちにコマの完成を知らせていた。すると、W 男→Ko 男→Yu 男→M 子の順に年長組保育室にやってきて、コマ作りが広がっていった。年中児の Ko 男や M 子は最初は不安そうだったが、S 男と Kz 男のイキイキとした表情ややりとりから安心して遊びに入れたようだった。

Kz 男は、言葉での素早いコミュニケーションが苦手で、自分の思いを上手く言葉にできずに黙り込んでしまい相手に伝わらないことがあった。S 男は、友だちに譲ってばかりで自分の意見を抑えぎみではないかと感じることもあった。

Kz 男は、自分がしたいことを達成できた感動体験をみんなに知らせようと自ら行動した。それに、S 男が共感し、優しく教えてくれた Kz 男への信頼と憧れを抱き、コマ作りの面白さをみんなに知らせようと S 男も動いた。この二人のかか



わりが契機となって、他の年中児が年長組保育室に入りやすくなったと感じた。

### (3) 園内探検と3歳児S男の変化（年中児と年少児）

【ねらい】

・身近な虫や花への発見を楽しみ、好奇心や探究心を高める。

“おでかけ図鑑”を用いた探検隊になりきって遊び、虫や花の理解を深める。

【時期】 4月18日～6月上旬

“発見して、捕まえる”という年長児の興味と、そこで気づいた具体的事象についての知識をもっと深めたいという担任の思いから園内探検を行った。その翌日に、年少組と共に園内探検を行い、一生懸命クイズに答えるS男を見て「すごいね」「かわいい」と年下の子に愛おしさを感じながら、リードして案内する年長児の姿が見られた。S男にとっては年長児と年長担任に心強さと親近感を感じたようだった。

数日後、アリの巣を見つけた年長児Kr男。担任や弟と観察しているとS男がやってきた。「あ！こっちにも入っていった」「大きいアリさんだ」など、次々と発見するKr男。S男は何も言わないがその傍らで共感しつつ、様々な発見をするKr男を凄いなー、と感じているようだった。

Kr男は、虫や木の実など自然の物が大好きで小さな変化にも気づく発見名人。この日は、自分が知らないアリの世界に出会えたことに感激し、探究心から夢中になって観察していた。そして、その発見を教師や周囲の友だちに知らせ、認めてもらうことで満足感を味わっていたようだった。

S男は、その日から年長担任のところに来て遊ぶようになり、自分のクラスの担任から離れて伸び伸びと遊べるようになった。また、様々な年中児や年長児と出会い、憧れの気持ちが芽生えたようで、一緒に夢中になって同じものや活動に取り組み、面白さを共有して楽しんでいるようだった。

そんなある日、園庭でウメの実を見つけ「先生見て」とKr男がやってきた。教師の傍にいたS男は、自分からKr男に近づき見せてもらった。S男の図鑑にも同じウメの木が写っており、「あ！一緒～」と大盛り上がり。その後、Kr男はウメの実をS男の分までとってくれた。S男の年長児への憧れと信頼感はより高まったように思われる。

今回、年長組での園内探検後、ダンゴ虫の家を作って世話をしたり、花を摘んで水の入ったビンなどに飾るなどの様子が見られるようになった。それと同時に、年少児S男の興味や人間関係の広がりも生まれた。物怖じせず、様々なお兄さんお姉さんとかかわれるようになったS男は、年少組の中で一番最初に虫とりが好きになり、その姿がクラスの友だちの興味を引き出すきっかけともなった。

## 6. 研究発表(7/26)を終えて

研究発表会後の子どもたちの様子やその時点で感じた課題、そして二学期の振り返りについて以下まとめておきたい。

### (1) その後の子どもたちの様子(成長)について

#### 年少組

- ・S男は、一人っ子なので幼稚園でお兄さんたちと一緒に遊ぶことが楽しい様子で、充実感を味わうことができている。年上の子どもたちにとっても可愛がってもらい、お兄さんたちの遊びの仲間に入ることができるようになった。また、他クラスにも友達関係が広がり、その子の名前を親しみをもって呼び、一緒に遊ぶようになり、クラスの仲間から園全体の仲間という意識へと変化してきている。
- ・N子は、5月と6月の二か月間クラスで女兒が一人だったため、昨年度クラスメイトだった年中児の女兒がクラスに遊びに来てくれることを喜んでいて。女の子が自分一人だけという寂しさを一時的にせよ忘れることができたのではないかと思う。特に、N子は家族ごっこが好きだが、新入園児と一緒に遊ぶことは難しく、物足りなさを感じていたように思われる。その点、親しい年中女兒と会話を楽しんだり、年中組に入ってドレスを着て遊んだりすることを楽しみながら、一緒に遊ぶことで満足感を得ることができたのではないかと思われる。
- ・年中児や年長児の真似をして長縄や縄跳びに挑戦したり、広告紙を使った剣や紙飛行機作りなどに励んだりするようにもなった。今までよりも難しい遊びに興味をもち、挑戦している。
- ・お遊戯会などの行事では、他クラスが頑張っている姿も見ることにより、自分たちも頑張ろうとするやる気が高まっていた。クラスの仲間としてだけでなく、園全体の仲間としての一体感が生まれつつあると感じている。

#### 年中組

- ・「認めてほしい」「見てもらいたい」という気持ちを担任や同じクラスの友だちに対してだけではなく、他クラスに対してもつようになった。人形劇やお笑い芸人大会など、新しい遊びが盛り上がり始めると「ばらぐみさんも呼びたいな」などと言って招待状を書いたり、呼びに行くようになった。そのことで、年中組の課題であった「認めて欲しい」という気持ちを、自分たちで積極的に表現し、満たすことができているように感じる。
- ・異年齢交流を積極的に取り入れる中で、年中組の新入園児であるT子やY子の「年長組(の男の子)が怖い」という気持ちを知ることができた。この言葉をきっかけに担任同士で行った話し合いが、この子どもたちの恐怖心をなくして距離を縮める工夫の一つとして、合同保育を企画するきっかけとなった。その結果、「怖い」という言葉が聞かれることもなくなり、むしろ親しみ感が増している。

・二学期後半から三学期にかけて、年長組への進級を意識する言葉かけが増えるが、その言葉かけに後押しされてか、身支度などにとっても時間がかかっていた新入園児のM男やR男らも早くできるようになってきた。

・年長組の仕事である動物当番の練習が三学期から始まるが、意欲的に取り組もうとする姿が見られる。「したくない」と言う子どもも中にはいるが、実際の練習場面では、「何すればいい?」「僕まだ何もしてないよ」などと言って、仕事を自分から求めてくるが多かった。面倒くさいという気持ちがある一方で、新しいことには挑戦しようとしていた。

### 年長組

・「お兄ちゃん」という響き（呼び方）を喜び、なかなか保育室に入れない新入園児がいると、「お兄ちゃんが連れて行ってあげる」と手をひいて案内する姿が見られるようになった。

・年下の子と同等に張り合っていた姿が減り、譲り合ったり、衝突の仲裁や泣いている子を慰めるなど、年上として何をすべきかを自ら考え行動することができるようになってきた。例えば、園庭で遊んだ後に保育室に戻る際、遊具や玩具が残っていないか点検を行うパトロールでは、「使っていないもん」「△△組の□□君が出した玩具だよ」など言って、自分たちの責任を回避する対応が減り、何かあれば自分たちが責任をもって片付けようとする姿勢が定着してきた。遊んだ後、「パトロール行ってきます」と、率先して片づけることができるようになった。

・年長組保育室にある人気が高い積木玩具を取り合うことが減った。年少、年中組の子どもたちが使うことを嫌がる様子がなくなり、隣で積木遊具を使用して遊んでいても見守れるようになった。

・活動内容ごとにリーダーになる子が入れ替わるようになってきた。中でも目立つのはKe男で、リーダーになることが多い。「○○しようぜ!」と遊びを呼びかけ、その呼びかけに集まった仲間同士をリードしながら遊ぶようになった。鬼ごっこで鬼役が決まらずに中断しそうな時なども、Ke男とYu男の二人が中心となって、意見を出し合い、解決策を自分たちで見出すことができるようになっていく。また、その体験を活かした自分たちだけの特別ルールも作り、いろいろな問題を乗り越えることができる工夫も自分たちなりにしていた。

・語彙が増え、言葉でのやりとりが増えてきた。口げんかも増えたが、一方的な言い合いではなく、お互いの主張（思い）をぶつけ合えるようになった。

・動物掃除の担当決めや、活動を行うグループの名前決めなど、議題にそって自分たちで話し合い、意見をまとめることができるようになった。

・予め掲示して伝えている一日の流れをイメージし、先のことを見通して園生活を送れるようになった。就学への期待感があるのか、長時間落ち着いて話を聞いたり、クラスでのまとまった活動にも参加できるようになっている。

## 全体

・異年齢児間の交流が自然と生まれる環境構成の工夫をすることで、他クラスとの行き来や交流が活発になった。そのことで、子どもたちは他クラスの担任との交流が深まり、担任間でもお互いの情報交流・協力がしやすくなった。今まで「自分のクラスの子どもを見る」という意識が強かったが、他クラスの子どもにも目が行き届くようになり、担任間の話し合いの際に、お互いの目にとまった子どもたちの情報を交換し合ったりする中で、結果的に、担任が見ていない場面での自分のクラスの子どもの様子を知ることができた。また、それぞれの成長や新たな一面に気づいたり、幼児理解が深まった。

・異年齢児同士で名前を呼び合う姿や会話が生まれ、一緒に遊ぶ姿が多く見られるようになってきた。一緒にいることが自然で安心できるようになってきた。年長児は下の年齢の子どもを思いやる気持ちが一層高まり、自然に優しく接することができるようになってきた。子どもたちの普段とは違う一面を知ることができた。また、年少児と年中児に年長児への憧れや尊敬の気持ちが生まれ、年長児の模倣あそびをすることも増え、遊びの幅が広がった。

・年齢に応じた遊び内容や遊び方があるのか、個々の遊びにおける面白さの中身はどうかなどをしっかりと見つめる、そこから保育へのヒントを得て活かしていくことを担任間で話し合い、検討を重ねることの大切さを再認識した。また、課題を一緒に考える中で、様々な考え方を知ることができ、保育の幅が広がった。

### (2) 今後の課題について

①M子の問題：年長児M子は、時には年少組へ行き、ままごとをしたり、時には同じクラスの友だちと家族ごっこをしたり、時には担任と共に製作して遊んだり、その場その場で自分の好きなことをして遊んでいる。その一方で、対等な関係で持続的に遊べる相手がいなかったりするため、どこか遊び込めていない一面もあるように思われる。また、そのことへの不満があるのか、我を通そうとする一面が強まり、勝気な性格が依然として変わらないままである。今後、担任がM子と対等にかかわる擬似的仲間関係を演じて遊ぶことで持続的に遊びを展開できるようにし向けていきたい。

②環境構成と集団規模の問題：子どもそれぞれに様々な興味や関心があり、その子どもが一番の興味に応じた環境構成を行うと（コーナーをたくさん設けてしまうことになり）、一緒に遊ぶ集団規模が少なくなるため、仲間集団が広がりにくくなるという問題がある。みんなで遊ぶ、活動するという機会や環境構成への工夫をもっと検討していく必要がある。

③担任の意図性と子どもの自発性の問題：異年齢交流にとらわれてしまい、必要以上に関係を作ろうとする声かけや仕掛けをしてしまっていたか。また、教師が積極的に遊びに誘うことで、楽しく遊ぶことは確かにできていた面はあるが、他方で子どもが自発的に遊ぶことをどこまで引き出せていたかを再検討する

必要性を感じる。子どもの自主性やアイデアを大事にしながら、担任の意図的な援助や環境構成が、子どもたちにとっての面白さを一層ひきだせる関係づくりを探っていきたい。その視点から、子どもの興味に合った活動や環境構成を提供できていたか。教師が設定した環境以外の遊びや興味についても、しっかり見とり、必要な援助や指導のあり方を検討していかなければならない。

④教師の実践力向上の問題：幼児理解、教師の質向上のために、既存の職員会議以外の職員会議を実施していきたい。そのこととかかわって、習得した考えやアイデアを子どもたち同士で活用していけるようなかかわり方や言葉掛けを工夫していきたい。また、今後も子どもの実態をよく把握し、子どもから出発する保育実践の方法や環境構成のあり方などを考えていきたい。

### (3) 二学期の取組みから

一学期の振り返りをもとに、運動会やお遊戯会など大きな行事体験を乗り越えた二学期。様々な経験を経た子どもたちの変化や成長を話し合った。その際、思っていた以上に、異年齢児同士で自然と混ざり合って遊ぶ姿がよく見られたことに気づいた。運動会や地域のお祭りで年長組だけが叩く和太鼓に憧れ、「やってみよう」という声から、教師が好きな時に和太鼓で自由に遊べるような環境設定をした。すると、年少児や年中児が真似をして遊び、リズムを覚え、熱中して叩く姿があった。それを見た年長児が「ちょっと教えてやるけん。見てて」と言って子ども同士で教え合い、全員で合わせて和太鼓をすることもあった。

また、今後の課題として挙げていた年長児M子においては、担任が時には赤ちゃん、時にはお姉さん、おじいさんやおばあさんなど、様々な役になりきり、M子と対等な立場で家族ごっこを行うことで、ごっこ遊びが大好きな年中組も興味を惹かれて加わり、集団的な遊びへの広がりを見せた。そこではM子がリーダーとなって進行する、生き生きとした姿が見られ、M子の欲求を満たせていたように思う。

12月初め、日々練習を頑張っていたお遊戯会が終わり、年長組の子どもたちはどこかポカンと穴が空いたようだった。そんな時、M子が「お店屋さんごっこしたらいいんじゃない!?そしたら、つまらなくないよ」とお店屋さんを企画・提案した。カレンダーを見て園行事がない日(12月18日)を設定し、その日に向けて少しずつ準備していこうというものだった。これはM子が年少組だった頃、年長組からお店屋さんへ招待された経験があり、それをイメージして湧きあがった発想かもしれない。クラスのみんなはすぐに賛同してくれ、自分たちにできることを考え合った。商品、ポスター、招待状、お客さんになってくれる年少組・年中組や担任たちのお財布とお金など、事前に準備を済ませた。前日にクラス内でお店屋さんとお客さんに分かれて練習をした。そういった努力が実り、当日はたくさんのお客さんがお店屋さんに来てくれ、大盛況で終えることができた。年長組ではほとんどの子がお店屋さんの三日前に行われる園行事のお餅つきに向けたカ

ウントダウンを、同時進行でカレンダーを見ながらやっていた。しかし、M子など数名はお店屋さんの日を気にしていた。それほどM子は、自分が企画したことだから最後まで責任をもってしなければならない…という責任感と目標をもって、意欲的に取り組んでいた。

年下のクラスの子どもたちは、年上のクラスの子どもたちをよく見ている。尊敬や憧れの気持ち、「自分も同じようにしてみたい」という意欲をもち、何とか模倣して遊ぼうとしていた。そこには年少児、年中児たちが年長児からアイデアや技術を学び、自分たちの遊びへ活かそうとしている姿が読みとれる。年長児が手本となり、その活動などが自然と受け継がれようとしているのである。また、年長児にとっても、年少児や年中児の存在は大きい。頼られること、教えてあげることが自分の自信に繋がり、さらに頑張ろうという意欲が生まれ、年下の子どもに優しくしようという思いやりの気持ちが育ったりもしている。こうして少しずつではあるが頼りになる、リーダー性をもった年長児らしさが育まれていくのではなかろうか。

## 7. 一、二学期での異年齢交流の取り組みから得られたこと

### (1) 異年齢交流での子どもたちの姿

異年齢交流において、年長児の存在はとても重要なポイントとなってくる。本園では、お泊まり会、園児宣誓や体操のお手本といった運動会での一人一役、動物当番など、“年長児だけ”ができる活動が多く、年長児たちはとても喜んでいる。こういった年長児ならではの活動内容が年少児、年中児の憧れに繋がり、早く年長組になりたいという願いを抱かせるのだろう。教師としても、年長児たちには「年長さんだから」、「来年は小学生だから」、「さすが年長さん！」など、年長児としての自覚や責任を意図的に促すような言葉かけや指導が自然と増える。年長児としてのこうした自覚や役割意識を高める働きかけをしながら、お散歩の際に年長児は年少児の手を引いたりするなど、年下の子どもを気にかける経験をし、年長児としての思いやりや自覚が芽生えていくのであろうと感じている。

しかし、年長児は自分たちだけが出来る活動や役割に応じた責任も重くのかかる。そのため、担任はクラス内で何度も話し合い、最後までやり遂げることができるようするために、子どもたちの自己決定を大切にしている。問題が生じた場合も、お互いの主張をぶつけ合ったり、時には譲り合ったりしながら自分たちで話を進めていく経験を積むようにしている。また、その中で友だちや教師の話聞く態度、そして聞いて考える力や集中して取り組む時間も長くなった。

またその頃、担任は年長児に、一人ひとりに得意なことや苦手なことがあることを話し、「何でもできるから凄いい、かっこいい」ではなく、「できないことでも挑戦する姿がかっこいいこと、その姿を応援できる友だちは素晴らしいこと、そんな人が本当に心が優しい人」などを伝えていった。すると、それまで苦手なこ

とに直面すると劣等感を感じて泣いていた S 男，自分ができたことを自慢にして見栄をはっていた Ko 男や Yu 男などに変化が見られるようになった。それと並行して，クラス全体の雰囲気も苦手なことをさらけ出せるようになり，それを認め合い応援し合える関係へと少しずつ変化してきたように思われる。

そういった成長と共に，誰でも楽しく遊べるような特別ルールを作ったり，子ども同士で遊びが伝承されていたり，何か困難にぶつかっても子どもたちだけで対応しようとするが増えていった。また，自分が直接関与していないことでも仲裁に入り，相手の話を聞こうとする対応も見られ，年長児が「小さい先生」のような存在になっているように感じた。

こうした年長児たちの成長は，担任の子ども理解や指導観と深く関係しており，子どもの願いを叶えようとする姿勢がまず問われていると考えている。成長著しい年長児だからこそ，異年齢が混ざり合って遊ぶ場面では，異年齢交流の良さをさらに引き出すような工夫が求められるのである。

少子化が進み，地域に同年代の子どもが減り，本園も小規模になってきている中，多様な子ども同士のかかわりは必要不可欠だと改めて感じる。一人ひとりの得意不得意や長所短所は様々で，それぞれが異なる個性や性格的特徴をもっている。生きる基礎を培う幼児期に多様な他者と出会い交わることは，人格形成上の基礎となる社会性を身につけることを意味している。教師はそのことをしっかりと心に留め，担当クラスだけでなく，園全体の子どもたちと向き合いながら時には子どもたちの架け橋となって，それぞれの良さを引き出せる保育実践に取り組んでいくことが大切だと思われる。

## (2)「幼児期にふさわしい体験や活動」とは

まずこの実践研究を始めるにあたって，担任間で「幼児期にふさわしい体験や活動とは何か」についての共通理解を図るために意見を出し合ったところ，以下の体験が共通項として挙げられた。

- 多様な他者との関係づくり体験（仲間とやりとりすること，集団で行動すること，喧嘩や対立を味わうこと，思いやることの心地よさを味わうことなど）
- 自我発揮体験（自分で考えること，達成感を味わうこと，挫折感を味わうこと，諦めずに挑戦することなど）
- 自然体験（植物や動物など自然と触れ合うこと，発見と探求することの面白さなど）

以上の体験が自発的な活動としての生活活動や遊び込む中で，幼児期に経験してほしい「生きる力の基礎を培うもの」と考えている。今回は，その中でも，本園の現状と特色を活かし，一つは「異年齢交流」を通しての成長，そして二つ目として本園の教育目標である“伸び伸びとした個性ある豊かな人格形成”に焦点をあて，幼児期にふさわしい体験や活動について検討した。“個性が伸び伸びと発揮できる”姿を「子どもたちが“遊び込む”姿」と捉え，上記の二点を視

点に実践研究を進めてきた。

今回の実践研究を通して、担任が意図的にクラスの垣根を越え、様々な個性をもつ子ども同士が響き合い、より大きな仲間集団で遊べるような工夫を意図的にしたことで、さらに生き生きと夢中になって遊び込む姿が見えたように思う。そういった経験の積み重ねこそが、子どもたち一人ひとりの自信となり、目標とした“伸び伸びとした個性ある豊かな人格形成”に繋がっていくことを実感した。

幼児期に体験させたい体験や活動は、最初に挙げたもの以外にもあるかもしれない。しかし、注意すべき点は、ともすれば教師や大人が重視しがちな教育的価値や発達の価値を基準にした願いや教育的目標にすり換えられていないかを見直せるか否かではなかろうか。今回の実践研究を通して気づいたこととして、教師としての願いは尽きないが、幼児期にふさわしい体験や活動を考える上で最も大切にすべきことは、子どもの視点に立つことであろう。子どもの視点に立つとは、今、一人ひとりの子どもが何を願い、どのような面白さを探求しようとしているか、体験や活動がその実現や達成に繋がるかを考え、工夫していくことではなかろうか。教育的又は発達の価値のある活動であったとしても、子どもたちにとってふさわしい体験や活動となるとは限らない。なぜならば、子どもたちの興味・関心と結びつかないものは、自発性が発揮されない魅力のない活動であり、子どもたちにとってほとんど意味がないものになってしまうのではなかろうか。

そのために教師として最も必要なことは、如何に子どもの気持ちや願いを読みとれるかであろう。目前の子どもたちが願っていることは何か。何に興味をもち、誰と何をしたいと考え、何を楽しいと感じているのか。それを子どもたちの自発的な遊びの姿から読みとり、その願いを実現させるために必要な環境構成や援助を柔軟に工夫していけることが、教師に問われる重要な専門的力量的の一つである。

保育の現場に立っていると迷いが尽きない。振り返ってみて、本当にあれで良かったのだろうかという疑問や、反省の連続である。しかし、その疑問や反省を活かしながら、より良い保育実践に向けて、目の前にいる子どもたちにしっかりと向き合い、その思いや願いに込められた面白さに共感し、それを共に楽しむ感覚を大切にしながら、保育の質の向上に向けた努力をしていきたい。